
ナイフがある

TS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナイフがある

【コード】

N3988M

【作者名】

TS

【あらすじ】

「好き」そう言って、女は俺にナイフを突きつけた。屋上での告白のお話。 いろいろ閲覧注意。

「好き」

そう言われると同時に、俺の体は地面に組み敷かれ、ナイフを首に突きつけられていた。見つめあう形で俺の腰に跨る、またが見ず知らずの女。

あまりに突然の出来事。今わかることは、女が同じ学校の人間で、リボンの色から同学年だということ。そして鬱陶しいぐらい俺の顔にかかる女の長い髪が、よく手入れをされているのか、いい匂いがあるということ。そして、ここが二人以外に誰もいない高校の屋上だということだ。

首にひんやりとした感触を覚えながら、そのままの姿勢で何も言葉を発しない女をじつくりと眺めてみる。

顔はまあまあ可愛いが、いかんせん俺の好みではない。俺の好みは、体にもっとメリハリのある女性だ。服の上から見ると凹凸があまりないように思われる。まあ、着やせするタイプなのかもしれないが、少なくとも俺の体に乗っていても、ほとんど重さを感じないし、出来ればもう少し肉が付いていた方が好みなのは確かだ。

そんな俺の失礼で不躰な視線にも、女はたじろぐことは無く、見開いた目でこちらを見つめている。その熱視線から恋慕の情を感じることは難しいが、俺以外を映そうとしないその瞳に、ありありと強い執着が見て取れ、背中に走るぞくりとした感覚に体が震えた。

依然、ナイフを突きつけたままで、押そうとも引こうともしない女。これでは埒が明かないし、そろそろ帰りたいのでこちらから話を振ってやる。

「俺が好きなのか」

女は俺の言葉に、人形のようにカッキリと首を落として頷いた。

「どこが、好きなんだ」

「さあ」

女が二度目に出した言葉は短いうえに、感情というものが全部削げ落ちたような抑揚のない喋りなので、意図が読み取りづらいことこの上なかった。

ただ、女のかすれも雑音もない澄んだ声だけは、わりと俺の好みだった。

「いつ、好きになったんだ」

「入学式」

「どうして、好きになったんだ」

「さあ」

「好きになった理由はないのか」

「……」

再び無言でこっくりと頷く女。そのまま首がもげそつだ。

余分な装飾は一切せず、要点だけを伝えるせいか、いちいち質問しなければいけないのはかなり煩わしい。

とつとと終わらせたいので、どうにでもなれと何も考えず一番聞きたかったことを聞いてみた。

「どうして、ナイフを俺に向けるんだ」

「……」

無言。頷きも、否定もしない。

「俺を殺したいのか」

「……」

また、無言。ただ、ナイフを握る手がわずかに揺れた気がした。

「おい、何か答えるよ」

それでも、女は無言だった。

いらいらが募った俺は、感情のまま女にまくしたてる。

「いい加減にしるよ。何か喋れよ。おい、お前に言ってるんだぞわかってんのか。大体、本当に俺のことが好きなのかよ。告白するんなら、もうちょいマシな方法でしろよ。それとも、俺が憎いのか。なら、さっさと刺せよ。こうやって押さえつけられてんのも体が痛エんだよ。殺したいなら刺せよ。簡単だろうが。ああ一応言っておくが、ただ刺すんじゃなくて裂いた方がいい。そっちの方が早く死ぬしな。オススメは首を掻っ切るのがいいな。女でも簡単に殺せるぞ。まあ、お前がじわじわ殺したいっていうなら話は別だけだな。

人間って意外と脆いから、結構致命傷の前にショック死しちまうんだ。知ってるか。爪と肉の間には痛点多いらしくてな、そこに針を刺すとやばいんだよな。どんな頑丈なやつでもそこはどうしようもないから、結構重宝するんだ。って話が逸れたな。あゝ、つまり何が言いたいかっていうと、刺したいならさっさと刺せってことだ。わかったか。おい。刺せよ。腹でも、足でも手でも首でも目でもなんでもいいから、刺せよ。刺せおい刺さねえのかよととと刺せばいいだろ。それで終わりなんだから刺せよ。おい。刺せ。おい。おい刺せ」

女はそれでも無言だった。

俺はとうとう我慢出来なくなり勢いよくナイフに向かって起き上がった。

しかし、ナイフは俺の首の肉をわずかに裂いただけに止まった。

なぜなら、女がナイフを持つ手を引いてしまったからだ。

「なんだよ、そのナイフはお飾りか。結局刺せもしねえんだったら

初めからやるんじゃないよ。糞が」

そう言い捨て、呆然としゃがみこんだ女を放置して、屋上の扉へ向かう。

くだらねえと心で呟くものの、胸にはわずかな失望だけが残った。そのままノブに手を掛けた瞬間、

「待って！」

初めて聞く女の切羽詰まった声。同時に背中に何かがぶつかる衝撃。女が俺の背中に縋り付くようにもたれかかる。

女の触れている部分が、焼けるように熱い。特に腰より少し上の部分は、熱された棒を直接押し付けられたようなともすれば痛みとさえ感じられる熱を感じる。いまにも肉が焼けただれてしまいそうだ。

「好き」

女は最初よりも剥き出しの感情で俺にささやきかける。

「殺したいくらい好き」

泣いているのか、震えるようなかすれ声で話続ける女は、「でも」と言葉を結んで告白した。

「好きだから死んでほしくない」

背後でカランと何かが落ちる音がした。振り返ると、地面にナイフが転がっていた。俺は地面から目を離し、女を見る。

女の顔を初め見た時は、人形のように無表情でつまらないと思っただものだが、今の女はくしゃくしゃに顔を歪めて泣いていた。涙に濡れたその表情を見た途端、俺は女が急に愛しくなった。

俺は地面に落ちた血濡れのナイフを拾い上げると女をぎゅっと抱きしめた。女もそれに答えるように俺の背中に手を回し、抱き合う。

「好き」

「俺もだ」

女は甘えるように俺の胸に頭をぐりぐりと押し付ける。

顔を上げた女の頬は赤く染まっており、俺にはにかむような笑みを向けた。

それにたまらなくなった俺は、女にそっと顔を近づける。女も俺の行動の意図を察したのか、ゆっくりと目を閉じた。

俺はそのまま女に顔を寄せ、赤い柔らかそうな唇にくちづけをした。

数秒ほどくちづけをしていたが、それでは満足出来ず女のわずかに開いた口へ舌をねじ込み、口内に舌を這わせる。女もそれに答えるように俺の舌を絡めとる。

ぴちゃぴちゃと二つの水音が混ざり合い、それが二人の興奮を高め、互いの舌をむさぼるように入念に絡み合わせる。俺はナイフを女の背中に突き立てた。ぐりぐりと中身を抉り出すように掻き回す。俺の口内は血と唾液で溢れて一杯になっていたので、舌で女の口へ流し込む。ごくりと女の喉が鳴る。しっかりと嚥下しているようだ。

「んく、んっ、ふ、う、んんっ、ぷはっ」

俺が女から舌を抜き取り口を離すと、女と俺の間に赤い唾液の橋が出来たが、すぐに崩れて女の口周りを赤く汚した。

「ふふ」

女は嬉しそうに笑っている。とても綺麗に笑っている。それを見ていると俺もなんだか嬉しくなり一緒に笑った。女がごぼりと血を吐き出した。俺は女の唇を舐め、再びくちづけを交わした。

結局、彼女がどうして俺のことを好きなのかは分からず終いだっ
た。

あの後、意識を失った俺たちを見つけたのは、屋上の鍵が開いて
るのに気が付いた先生だった。確認のため扉を開けたら、血を流し
た二人が折り重なるように倒れていたようで、かなり驚いたことだ
ろう。しかも、先生が見つけたところにはかなりの出血のため、既に
死んでいたそうだ。

もう、彼女から話を聞くことは出来ない。死人に口なしとはよく
言ったものだ。

死んだ今でも彼女のことばかり考えている。こうやって俺はずっ
と彼女に囚われたままなのだろうか。

出棺直前にそんなことを考えていたが、棺の中の死体は家族の添
えた花で一杯でも安らかな顔をしていた。こうして思い悩んで
いる俺とは対照的なのが、なんだか無性に悔しかった。

蓋が閉じられ、挨拶が終わると棺が外へ運び出される。棺を見送
る人の中には、腹の底から唸るような恨み言を吐き出している人も
いた。

どうして、死ななければならなかったのか。あいつが死んでいれ
ば良かったのに。そう憎々しげに悲しみ呟く姿に、俺はいたたまれ
なくなり、そつとその場を後にした。

火葬場は家の近くだったので、俺は一人歩いて向かった。

俺が着いたところには既に棺が火葬場に運び込まれていたが、俺は
死体が焼かれるところなど見たくなかったので、外で待つことにし
た。

一時間程したころだろうか。火葬場の煙突から煙が上っていく。

天に消えていく煙を見ていると、なんだか意識がぼんやりとし、このまま俺も消えてしまいそうだなと思った。

煙をぼんやりと眺めながら、俺は煙の向こうに彼女を夢想した。

結局あれは恋だったのだろうか。少なくとも彼女はこれで俺の特別になった。焼けつくような、身を焦がすようなあのどうしようもない感情をなんと呼ぶのか。俺にはわからない。

そして、彼女は本当に俺のことを好きだったのだろうか。

いつか、彼女と死後の世界で出会うことがあるならば、彼女に聞いてみたいなと思う。今は彼女が俺のことを好きだといいなとさえ思える。

そんな自分の変化に苦笑するとともに、やっぱり無理かもしれないとも思う。

なぜなら、人殺しの俺はきつと地獄行きで、あんな綺麗に笑う彼女は天国に行くだろうと思ったからだ。いや、彼女には天国に行つてほしいな、とそう思った。

そんなことを考えていると、彼女にどんどん会いたくなってきた。すると、先ほどまでの今にも消えそうなぼんやりとしていた意識が、急にはつきりとするのだから現金なものだ。

俺はすつきりとした気持ちで煙に背を向けると、しっかりと足取りで歩み始めた。

初めは気長に待とうと思ったが、この消化不良のままにいるくらいなら、彼女に会いたいなと素直に思えた。

彼女に会えるかなんてわからないが、今ならなんでも出来る気がした。

一度立ち止まり、空を見上げる。

あの世でいつか会える日を夢見て。

「待ってるよ」

俺は彼女の元へ歩き出した。

背中には、いまだに彼女の熱が残っている気がした。

(後書き)

あとがき

どうも、初めましてTSと申します。
色々消化不良でわけのわからない内容ですが、ここまで読んで頂きありがとうございます。

最後に投稿してから1年半が経ち、そろそろ何か投稿しようということ、初めての短編に挑戦してみました。
いままではラブコメもどきしか書いたことがなかったので、こんな恋愛もどきを書くのはとても新鮮でした。
次は、もっと純愛ものも書いてみたいですね。

誤字、脱字、質問、批評などは気軽に書き込みください。
あと、書き込む場合はどれだけつまらなくても、全部読んでから書き込みをお願いします。

最後にもう一度。

読者の皆様、ここまでお読み頂きありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3988m/>

ナイフがある

2010年10月20日13時29分発行